東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

両大戦間におけるフィレンツェ文化の概観

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 1992-12-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/729

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

両大戦間におけるフィレンツェ文化の概観

小　林　　勝

はじめに

作家のアルベルト・モラヴィアは，彼が文学活動を開始した戦前のイタリアでは，文学上の首都はフィレンツェだったことを回想している[1]。確かに両大戦間のイタリアにおける文化の中心は，政治・行政の中心であるローマでも，経済・産業の中心であるミラノでもなく，トスカーナの一地方都市にすぎないフィレンツェだった。今世紀前半，文化創造の源として雑誌が今日とは比べものにならないほど大きな地位を占めていたが，両大戦間におけるフィレンツェの文化的優位は，この時期に刊行された有力雑誌の多くがフィレンツェで刊行されていたことからもわかる。同じように今世紀初頭のフィレンツェでもパピーニやプレッツォリーニらによって『レオナルド』，『ラ・ヴォーチェ』，『ラチェルバ』といった雑誌が相次いで刊行され，これらの雑誌を舞台に華々しい文化運動が繰り広げられた。このことは，20世紀前半のイタリア文化を展望すると，二つの大戦に先行する10年ほどの時期，フィレンツェが文化的に輝いていたことを意味している。

第一次大戦終了後に刊行された最初の重要な文学雑誌である『ラ・ロンダ』は，1919年にローマで創刊され1923年まで続いた。イタリアの文学上の中心は，1926年にフィレンツェで『ソラリア』が創刊されたのを契機に，ローマからフィレンツェに移った，と言える。この時期のイタリアの政治に目を向けると，1922年のローマ進軍によって権力を奪取したムッソリーニは，1925年頃までに政権の基盤を安定させることに成功している。このいわゆるファシズム体制の正常化に符合して，まるで権力の本拠地であるローマを避けるかのように，イタリア文化の中心はフィレンツェに移ったのである。

このことは，両大戦間のフィレンツェ文化のあり方を考える上で象徴的である。つまり，フィレンツェの文化には反ファシズムと言わないまでも，非ファシズムの傾向が明らかに認められる。『ソラリア』に続いて，『イル・フロンテスピツィオ』や『レッテラトゥーラ』，『カンポ・ディ・マルテ』などの有力雑誌が刊行されたが，本論文ではこれらの雑誌を通して，この時期のフィレンツェの文化状況に光を当ててみたい。

(1) 『ソラリア』

雑誌『ソラリア』は1926年1月，フィレンツェで創刊された。アルベルト・カロッチが編集を担当したが，1929年の11月にジャンシーロ・フェッラータも編集に参加した。翌1930年にはフェッラータに代って，アレッサンドロ・ボンサンティがカロッチと共同で編集にあたったが，1933年以降は再びカロッチが単独で編集にあたった。

『ソラリア』は月刊だったが，随時合併号が組まれたため，1934年の最終号（実際の刊行は1936年）まで，実質で78号を刊行している[2]。1926年から32年まで合併号は年に2度ほどだが，1933年はほとんどが合併号で，この年は6号しか刊行していない。同様に1934年（実際の刊行とはずれがある）は5号刊行している。各号は大体70ページ程度で，数ページは広告にあてられていた。各号とも三つの部分に分けられる。第一は小説を中心とする創作のページで，詩が掲載されることもあった。第二の部分は比較的長めの評論にあてられた。第三は短い書評などを集めた雑録である。また，『ソラリア』のグループと親しい芸術家たちによる素描や木版が雑誌の各号を飾った。マリーノ・マリーニやジョルジョ・モランディ，フィリッポ・デ・ピシスといった人たちである。

発行部数は通常500だが，イターロ・ズヴェーヴォの特集号のように700部発行されることもあった。予約購読者は200から300で，残りは内外の雑誌との交換に送られる他はフィレンツェの書店で販売されたが，ほとんどが返本された。『ソラリア』はパレンティ社から刊行・販売されていたが，刊行に要する費用は中心メンバーたちの拠出でまかなわれていた[3]。

先に見たように，この雑誌の創刊は1926年1月，1934年付の最終号が実際に刊行されたのは1936年のことである。このことは，『ソラリア』の歴史が，イタリアにおけるファシズム体制の確立からその絶頂に至る時代の流れと並行関係にあったことを示している。イタリアにおけるファシズム体制の成立は，普通考えられているように，ファシストのローマ進軍が行われた1922年10月28日ではなく，ムッソリーニがマッテオッティ事件の危機を脱し，議会制民主主義との決別を下院において宣言した1925年1月3日のことである[4]。『ソラリア』は，このファシズム体制確立のちょうど1年後に創刊されたことになる。この時期，ファシズムの文化統制はまだそれほどきつくなく[5]，統制は主に新聞，ラジオ，映画などのマス・メディアに向けられており，少数の知識人による文化活動にはあまり関心が払われてはいなかった。ピエーロ・ゴベッティが1924年にトリノに『イル・バレッティ』を創刊し，これを拠点に試みたような明確な体制批判の行動はもとより不可能になっていたが，少数の者を対象とした文学活動を展開する余地はまだ残されていた。このわずかな間隙を縫うかのように，文学雑誌『ソラリア』は，ファシズムの規制の境界すれすれの線に誕生したのである[7]。

『ソラリア』刊行の中心として活躍したのは，非常に若い人たちだった。編集長のアルベルト・カロッチは，富裕な弁護士の息子として1904年にフィレンツェに生まれている。レオ・

フェッレーロは著名な歴史家グリエルモ・フェッレーロを父に，精神病学の大家チェーザレ・ロンブローゾの娘を母に1903年にトリノに生まれているが，当時ユダヤ系のこの富裕な一家はフィレンツェに住んでいた。彼は1928年に反ファシズムという政治的理由からフランスへ亡命するが，亡命後もフランスの最新の書物についての紹介をしばしば『ソラリア』に寄せている。1907年にミラノで生まれたジャンシーロ・フェッラータは，『ソラリア』創刊時は二十歳にもなっていなかった。幅広い教養の持ち主で，後にヴュシュー文庫の館長やフィレンツェ市長を務めることになるアレッサンドロ・ボンサンティは，1904年にフィレンツェに生まれている。

今世紀初頭のフィレンツェでは，やはり二十代の若者であるパピーニやプレッツォリーニらが『レオナルド』や『ラ・ヴォーチェ』を創刊しているが[8]，彼らは既成の社会や文化を激しく攻撃，イタリアに新たな文化を打ち立てるべく開かれた文化運動を展開した。これに対して，『ソラリア』の若者たちは自分たちの内なる文学の世界へ閉じこもろうとする傾向を持っていた。この違いは，20年の時を隔てた時代状況の相違だけでなく，当事者たちの気質の相違にも帰せられる。パピーニらが奔放な行動によって既成の権威の破壊を目指したのに対し，イタリア文化，ヨーロッパ文化の真の理解者であると自負する『ソラリア』の若者たちは，文学に関する貴族的優越感を結合の絆として[9]，伝統文化の中枢へ入り込むことを目指していた[10]。そして，彼らはある程度それに成功していた。

『ソラリア』を，当時まだ無名の若者たちが修業時代に刊行した同人雑誌というふうに見なしてはならない。『ソラリア』はその刊行時においても，すでに一定の権威を有していた。著名な作家たちが多忙にもかかわらず無報酬で『ソラリア』に執筆したのには，それなりの理由があった。この雑誌に書くことは，文学上のエリートであることを意味していたからである[11]。

そして，このような権威を保証していたのが，『ソラリア』の後ろ盾とも言うべき詩人モンターレの存在だった[12]。1896年にジェノヴァに生まれたモンターレは，ゴベッティがトリノに設立した出版社から最初の詩集『鳥賊の骨』を1925年に刊行，1927年に出版社ベンポラッドの社員となりフィレンツェに移り住んでいた。そして1929年にヴュシュー文庫の館長に就任，同文庫のあるストロッツィ宮殿から目と鼻の先にあるフィレンツェの有名なカフェ，ジュッペ・ロッセの常連として自分の周囲にフィレンツェ在住の知識人を集めていた。この中にエリオ・ヴィットリーニ，カルロ・エミリオ・ガッダ，アルトゥーロ・ローリア，レオ・フェッレーロ，サルヴァトーレ・クワジーモドらがいた。こうして，ジュッペ・ロッセは『ソラリア』の司令部として，両大戦間のフィレンツェ文化の華やかな舞台となったのである。モンターレはテレビのインタビューに答えて，当時を回想している[13]。「フィレンツェではかなり積極的に『ソラリア』に寄稿しました。編集長はアルベルト・カロッチでしたが，後に大学出たてのジャンシーロ・フェッラータが彼に協力して仕事にあたりました。この頃がこの雑誌の最も充実した時期でした。そこでは政治の問題に触れるのを避けつつも，外国の文学や多くの事

柄が話題にされていたからです。このことが多大の不信を生み，広場の向かい側，つまりジュッペ・ロッセではなくてパスコフスキというカフェを拠点にしていた，ベルト・リッチ編集の『ルニヴェルサーレ』という雑誌が我々のことを激しく攻撃し，我々はみな胡散臭い連中であり，ゆがんでおり，道徳的に見ていかがわしい連中である，と言っていたほどです。」

次に『ソラリア』の主要執筆メンバーと紙面の傾向を見てゆくことにしよう。ジョルジョ・ルーティは『ソラリア』の試みを，『イル・バレッティ』が持っていたヨーロッパへの深い関心と，『ラ・ロンダ』の厳格な文学性の積極的な統合と規定している(14)。すでに触れたように，『イル・バレッティ』はゴベッティによって1924年にトリノに，『ラ・ロンダ』はカルダレッリらによって1919年にローマに創刊された雑誌である。だが，『ソラリア』が『イル・バレッティ』から受け継いだのはヨーロッパへの関心だけではなかった。『イル・バレッティ』の人びとは，生活と結び付いた文化，つまり諸々の社会現象の影響と密接に結ばれた文化がもたらす刺激に対し敏感で(15)，ファシズム体制には否定的だった。『ソラリア』は『イル・バレッティ』の社会的関心も合わせて引き継いでいた。作家ヴィットリーニは，「ソラリア派という言葉は，当時の文学の世界では反ファシスト，ヨーロッパ人，普遍主義者，反伝統主義者を意味していた」と，述べている(16)。ヴィットリーニはまた，『ソラリア』には『ラ・ロンダ』の流れとヨーロッパの流れが合流しており，「我々の文学教育にはヨーロッパとレオパルディが同時に役立った」と，回想している(17)。

政治などの社会的問題に関心を払い，これに参加することに倫理的責任を感じる態度と，『ラ・ロンダ』に見られる，「文学を文学以外のものから潔癖に切り離して守ろうとするこの孤立の姿勢」(18)の間にはかなりの隔たりが認められるが，『ソラリア』には社会参加と文学至上主義という相反する傾向が最後まで併存し，後にそれが，『ソラリア』から分岐する『ラ・リフォルマ・レッテラーリア』と『レッテラトゥーラ』という二つの雑誌を生むことになるのである。さまざまな傾向の折衷・混淆は『ソラリア』の基本的特徴であるが，それは，この時代の文学生活の事実上の中心となったフィレンツェにおいて初めて実現可能なことであった(19)。『ソラリア』について，はっきりとした方針や展望の欠除を指摘することは可能かもしれないが，特定の思想に依拠してそれに奉仕することを嫌い，柔軟な姿勢を貫こうとする態度は，プレッツォリーニの『ラ・ヴォーチェ』以来，フィレンツェの伝統であった。このような態度は，バルジェッリーニらによって同時代のフィレンツェで刊行されていた『イル・フロンテスピツィオ』にも認められる。

『ソラリア』の書き手のうち『ラ・ロンダ』の同人は，リッカルド・バッケッリやアントニオ・バルディーニがわずかに目に付く程度である。しかしながら，とりわけ初期において，『ラ・ロンダ』の影響は絶大だった。アルベルト・フォリンは，『ソラリア』の主要執筆者であるアルベルト・コンシッリオ，ラッファエッロ・フランキ，エリオ・ヴィットリーニらにそれを認め，彼らの『ラ・ロンダ』に対する態度を，弟子たちの師への敬意と説明している(20)。

これに対して，ゴベッティの『イル・バレッティ』のメンバーは『ソラリア』の中核を形成

することになる。エウジェニオ・モンターレ，ジャコモ・デベネデッティ，ラッファエッロ・フランキ，セルジョ・ソルミらがこれにあたる。ヴィットリア・コルティは，彼らを『ソラリア』に招いたのはモンターレの働きとしている[21]。『イル・バレッティ』のヨーロッパへの関心が『ソラリア』の紙面で顕著に認められるようになるのは，雑誌創刊から2，3年してからのことであり，その意味では，1928年の1月号に掲載された，レオ・フェッレーロの論文『イタリアがヨーロッパ文学を持つために』は画期的だった[22]。また，1929年に編集に参加したジャンシーロ・フェッラータは，フランス現代文学の紹介を精力的に推進している[23]。こうして，モンターレやデベネデッティやソルミは，自分たちのヨーロッパ探究のよりふさわしい場を，ゴベッティ亡き後の硬直した『イル・バレッティ』ではなく，より柔軟な『ソラリア』に見出すことになる[24]。『ソラリア』紙上ではプルースト，ヴァレリイ，ジード，リルケ，カフカ，エリオット，ロレンス，ジョイスらの紹介が盛んに行われた。しかし，必ずしも彼らが当時のヨーロッパの現実を正しく理解していたわけではない。彼らのヨーロッパは現実のヨーロッパではなく，神話的・文学的概念であった[25]，ということも指摘しておく必要があろう。

かつて『イル・バレッティ』に執筆し，後に『ソラリア』に寄稿した人びとをトリノ・グループとすると，執筆者の多くはフィレンツェ・グループと定義できるかもしれない[26]。フィレンツェ在住の若い知識人からなるこのグループには，例の雑誌刊行の中核メンバーの他に，コッラード・パヴォリーニ，エリオ・ヴィットリーニ，アルトゥーロ・ローリア，レナート・ポッジョーリ，ジャンフランコ・コンティーニらが含まれるが，モンターレの例に見るまでもなく，そうはっきりと分類できるわけではない。

アレッサンドロ・ボンサンティは『ソラリア』に合流した人びととして，『イル・バレッティ』のトリノ・グループに次いで，イタロ・ズヴェーヴォ，ジャーニ・ストゥーパリク，ウンベルト・サーバらトリエステのグループをあげている[27]。ピエル・アントニオ・クワラントゥッティ＝ガンビーニやヴィルジーリオ・ジョッティもこの系列に加えることができる。1928年に亡くなるズヴェーヴォの場合，この雑誌に積極的に寄稿したのとはやや異なるが，『ソラリア』は1928年の2月号の全ページを彼に提供し，1929年の3・4月号で彼についての特集を組んでいる。これにはジェームズ・ジョイスやヴァレリイ・ラルボーといった外国の作家たちも寄稿している。いっぽう，サーバについては，1928年の5月号で特集を組み，1931年の2月号では半分近いページを彼一人に提供している。『ソラリア』が特定の作家について特集を組むのは，他には1930年の5・6月号のフェデリコ・トッツィと1933年の7-10月号のスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの場合だけである。『ソラリア』のズヴェーヴォとサーバに対する関心にも，やはりモンターレの介在が認められる[28]。ズヴェーヴォとサーバはともにトリエステ出身のユダヤ人であるが，ジョルジョ・ルーティはこの二人にカフカを加え，ユダヤ的国際性を『ソラリア』のヨーロッパへの開かれた姿勢の決定的な要素の一つとして，イタリアの地方性打破の鍵と認めている[29]。

他に『ソラリア』を舞台に活躍した作家にカルロ・エミリオ・ガッダがいるが，彼の活躍は，この雑誌が実験的な試みに対して積極的だったことを示している[30]。また，1927年の3月号で映画を特集しているが，これは当時の文学雑誌としては画期的なことであり[31]，『ソラリア』の実験精神の現れである。

最後に『ソラリア』廃刊の経緯について簡単に触れることにしよう。1934年8月7日付の県知事の通達によって，『ソラリア』の3・4月号（実際の刊行と時間的にずれる）は当局によって，公序良俗に反するとの理由で押収された。わいせつな表現があるとされたのはテッラチーニの『将軍の娘たち』とヴィットリーニの『赤いカーネーション』であるが，少なくともヴィットリーニに関する限り，この措置に政治的理由を認める可能性は否定できない[32]。この年の初め，トリノではレオーネ・ギンズブルグやカルロ・レーヴィらの知識人グループに対する検挙が行われたが，当時ファシズム当局は従来のマス・メディアに対する統制だけでなく，一般大衆からは孤立した知識人の活動についても締めつけを強化していたのである。こうして，これ以後『ソラリア』編集部は事前検閲用に当局にゲラを提出することになる。この頃，パヴェーゼの詩集『働き疲れて』を『ソラリア』刊行の独立した書物として出版する計画が立てられていたが，この詩集も当局の検閲によって1936年まで刊行を延ばされた。こういう状況の中で，1934年8月の押収以後，『ソラリア』の刊行はまばらになり，5・6月号をこの年の11月に刊行し，1935年と36年は1934年度の号をそれぞれ一号ずつ出して，結局はそれで廃刊ということになった。

だが，廃刊の原因を当局の干渉のみに帰することはできない。1933年から35年にかけてイタリアの知識人を広くおおっていた挫折感，無力感の中で，創刊以来編集長として中心となってこの雑誌を引っ張ってきたアルベルト・カロッチは，『ソラリア』を続けてゆくことに意義を見出せなくなり，新しい雑誌の構想を立てていたからである[33]。すでに末期『ソラリア』ではジャコモ・ノヴェンタ，ニコラ・キアロモンテ，ウンベルト・モッラら，思想に強い関心を寄せる書き手が台頭し，文学派を圧倒していたが，カロッチは『ソラリア』をフランスの『エスプリ』のような思想雑誌に改変することを考え[34]，そのことが文学至上主義の立場を取るアレッサンドロ・ボンサンティとの間に対立を引き起こしていた。こういう状況のもとで当局による弾圧が加えられ，雑誌廃刊という事態に至ったのである。

(2) 『イル・フロンテスピツィオ』

『イル・フロンテスピツィオ』は1929年5月，書籍市に際しフィオレンティーナ書店の総合目録の付録としてエンリコ・ルカテッロの編集で刊行されたが，非売品で，この時点ではまだ雑誌として定期的に刊行する予定はなかった[35]。ところが，これが好評だったため，同年9月に第2号が出，以後雑誌としての体裁を整えることになった[36]。しかし，内容は相変らず読書案内が中心だった[37]。翌1930年6月，刊行はヴァッレッキ社に移るが[38]，編集はルカテ

ッロが続け，ピエロ・バルジェッリーニが彼を補佐した。

バルジェッリーニが編集を担当するのは1931年からである。彼は1923年に，詩人のカルロ・ベトッキ，小説家のニコラ・リージとともに『イル・カレンダーリオ・デイ・ペンシエーリ・エ・デッレ・プラーティケ・ソラーリ』という雑誌を，フィレンツェ近郊のスカルペリーアで毎月100部ずつ1年間で12号自費出版したことがあった。これは素朴なカトリック精神に基づいた，ストラパエーゼ（郷土派）の先駆とも言える雑誌だった。バルジェッリーニはこのとき扱ったテーマを再び『イル・フロンテスピツィオ』で取り上げようとした。そして，この3人が雑誌の中核となった。彼らに共通しているのは，3人とも測量技術を学び（バルジェッリーニとベトッキはフィレンツェの工業専門学校の同級生），文学の世界を独自に切り開いたことである。また，当時バルジェッリーニは教師，リージは測量技師，ベトッキは建設会社に勤務しており，職業的な文筆家ではなかった。そして，ともに兵士として第一次大戦を体験していた。やや年長のリージを除くと，フィレンツェの有名なカフェ，ジュッベ・ロッセにも出入りせず[39]，この点でもフィレンツェのもう一つの有力雑誌『ソラリア』のメンバーとは気質を異にしていた。後にこの雑誌に参加する詩人のマリオ・ルーツィは，「リージやベトッキは内面的な事実に最大の関心を向け，微細な真実の発見に強く執着していた。……要するに『イル・フロンテスピツィオ』は，具体的な事物や日常の現実，人間が最も慣れ親しんだ尺度に固執する素朴な精神の中から生まれた。」と，証言している[40]。

この3人に加えて雑誌を側面から支える役割を果たしたのが，聖職者のジュゼッペ・デ・ルーカ師と作家のジョヴァンニ・パピーニである。アンナ・パニカーリは，デ・ルーカ師を『イル・フロンテスピツィオ』の真の組織者と見なしている[41]。この雑誌は，ローマ教会とイタリア政府の間のラテラーノ協定締結直後のカトリックの高揚した雰囲気の中で誕生したが，デ・ルーカ師の考えでは，カトリックの教えこそ新生ファシズム国家の文化的基礎をなすべきであった[42]。師はイレネーオ・スペランツァのペンネームで盛んに寄稿している。パピーニは1916年から19年にかけてそれまでの無神論の立場からカトリックに改宗，1921年に『キリストの生涯』を書き，この時代の最も重要なカトリック知識人と目されていた。当時の青年たちに対するパピーニの影響は圧倒的で，カルロ・ボーが大学進学に際しフィレンツェを勉学の地に選んだのはパピーニと知り合うためであったし[43]，バルジェッリーニも彼の影響を強く受けていた[44]。パピーニはまた，画家のアルデンゴ・ソッフィチやカトリック作家のドメニコ・ジュリオッティとともに，『イル・フロンテスピツィオ』におけるトスカーナ的伝統を体現していた[45]。マリオ・ルーツィも，初期においてこの雑誌がパピーニとデ・ルーカ師の影響下に成立したことを証言している[46]。彼らの戦闘的カトリック精神は中産階級の支持を見出し，雑誌は短期間に大成功を収めた。エンリコ・ヴァッレッキは，毎月1万部が印刷され，定期購読者も数千名いた，と回想している[47]。これは当時としては異例の数字だった。

しかしながら『イル・フロンテスピツィオ』はその10年の歴史を通じて完全にストラパエーゼ（郷土派）の基調に貫かれていたわけではない。これと対立するストラチッタ（都会派）

的な傾向，すなわちヨーロッパ文化への強い興味も認められる。この傾向を代表しているのがカルロ・ボーと彼の周囲の若い人びとである。このような矛盾について，バルジェッリーニ自身は，『イル・フロンテスピツィオ』がカトリックの雑誌であることを理由としてあげている[48]。つまり，異端はある特定の考えに固執し，他の一切の思想を排撃するが，カトリックの普遍的な立場はあらゆる思想と調和しようとする，と言うのである。カトリックの信仰に誠実でありさえすれば，『イル・フロンテスピツィオ』から拒否されることはなかった。バルジェッリーニは結果的に見ると，ファシズムと妥協することになった。このために，文学史家の中には彼をファシズム体制の積極的な協力者と見なす人もいるが[49]，彼の近くにいた人びとは好意的な評価を寄せている。カルロ・ベトッキは，バルジェッリーニは雑誌を存続させるためにやむを得ずファシズムと妥協したが，決してファシスト的な考えの持ち主ではなかった，と言明しているし[50]，カルロ・ボーは，イタリアで最初に人種差別反対の論陣を張った人物として彼について言及している[51]。ルイジ・ファッラカーラはさらに，ボーの革新的な文学運動を理解をもって支持し，この運動を積極的に擁護したことをバルジェッリーニの功績としている[52]。

1911年にリグーリア地方のセストリ・レヴァンテに生まれたカルロ・ボーは，フィレンツェ大学に入学するとすぐにバルジェッリーニ，リージ，パピーニら『イル・フロンテスピツィオ』系の作家たちを知り，早くも1930年2月にこの雑誌への執筆を開始している。幼児からの豊富な読書体験に培われた，ヨーロッパ文化，とりわけフランスの文化に対する強い関心と理解をもって，ボーは『イル・フロンテスピツィオ』を舞台に同時代のフランス文学の紹介に務めた。ボーは特にベトッキとファッラカーラに影響を及ぼし，バルジェッリーニを説得，この融合から第二の本当の『イル・フロンテスピツィオ』が誕生した，とオレステ・マクリーは証言している[53]。バルジェッリーニは詩人であるベトッキに雑誌の詩の欄を担当するように依頼，ベトッキは鋭い感性でもって新しい詩の動向に理解を示し，こうして『イル・フロンテスピツィオ』は1934年以降，ボーを中心に結集したマリオ・ルーツィ，ジャンカルロ・ヴィゴレッリ，オレステ・マクリー，アレッサンドロ・パッロンキ，ピエロ・ビゴンジャーリらを迎え入れることになった。彼らの多くはボーのフィレンツェ大学の2，3年後輩にあたる。ビゴンジャーリは，彼らが『イル・フロンテスピツィオ』に参加した理由としてベトッキの存在をあげている[54]。

このような経緯により1936年から38年にかけて『イル・フロンテスピツィオ』はその変遷の中で，最も豊かで矛盾に満ちた段階を示すことになる[55]。つまり，本来ストラパエーゼ（郷土派）的傾向をもって出発した『イル・フロンテスピツィオ』が，ボーらの活躍によってヨーロッパへの窓となったのである。この時期，セルジョ・バルディはT. S.エリオットの『聖灰水曜日』，レオーネ・トラベルソはヘルダーリンの詩，ロドルフォ・パオーリはカフカの『変身』を翻訳し，雑誌にのせている。このことは，『ソラリア』が廃刊したいま，ある意味で『イル・フロンテスピツィオ』が従来『ソラリア』が担っていた役割を引き継いだことを意味

している[56]。両大戦間のフィレンツェでは，一方の側に『ソラリア』の作家たち，もう一方の側に『イル・フロンテスピツィオ』の作家たちがいた。彼らの間には表立った衝突がなかった代りに，直接のつながりもなかった。ところが，ボーを中心とする若い人たちは，モンターレら『ソラリア』系の作家たちのたまり場であるカフェ，ジュッペ・ロッセに出入りし，そこで彼らと交わりを持つに至った。ビゴンジャーリは，自分たちがこの二つのグループのある種の接合点をなしていた，と言えるかもしれない，と回想している[57]。

カルロ・ボーを指導者とするこの青年たちの文学運動は，文学史の上でエルメティズモと呼ばれている。彼らの文学理論は難解さをもって知られ，エルメティズモという言葉も広義にはサーバ，ウンガレッティからモンターレ，クワジーモドらに至るイタリア詩の流れを指すものとして使われているが，ボーらのこの運動は当時の政治状況に照らして考える必要がある。1935年から36年にかけて達成されたエチオピア併合によってファシズム体制は頂点を極め，国民生活の隅々まで国の統制下に置かれた。ビゴンジャーリは，当時彼らが息苦しい，絶望的な状況の中にいたことを回想している[58]。しかしながら，ファシズム体制の絶頂期は同時に反ファシズムの気運が熟した時期でもあった。ボーによると，この点に関しては，1936年7月に勃発したスペイン内戦が重要な契機をなしていた[59]。

しかし，ボーたちのグループの反ファシズム感情は，トリノの知識人グループの場合のようには具体的行動に結びつかず，内に隠れざるをえなかった。正面から現実へ立ち向かうのではなく，この世界からの隔絶という方法を彼らは選択した[60]。ボーによれば，彼らによる純粋詩の賞揚は，現実の拒否を意味していた[61]。彼はまた，スペイン戦争を契機にフランスのカトリック作家たちに生まれた反ファシズム，反ナチズムの気運と異なり，彼らのファシズムへの反対が現実逃避という形を取ったことについて，公然たる反対の不可能な政治体制の下ではやむを得ないことである，と説明している[62]。

『イル・フロンテスピツィオ』を舞台にしたボーたちの活動は，ファシズム当局にとって容認しがたいものであったし，創刊以来この雑誌の有力な支柱であったパピーニらの意向にも反するものであった。ロマーノ・ビレンキは，ムッソリーニが，イタリアの最も偉大な作家はパピーニである，と言明したことを伝えているが[63]，ビゴンジャーリは，あまりにも公の権威となってしまったパピーニのもとに出入りするのを彼らがやめてしまい，そのために彼の怒りを買ってしまったことを回想している[64]。雑誌の内部に見られる，ファシズムに対する態度の相違は，やがて決裂を引き起こすことになる。カルロ・ボーは1938年9月，有名な論文『生命としての文学』を『イル・フロンテスピツィオ』に発表，これを機に彼のグループはこの雑誌を離脱する。この論文は，エルメティズモのグループが自分たちの立場を明らかにした，言わば彼らのマニフェストであり，ベトッキに言わせれば，まさにファシズムへの宣戦布告だった[65]。

『イル・フロンテスピツィオ』ではパピーニとソッフィチ，それに編集長を退いたバルジェッリーニが顧問となり，パピーニの女婿バルナ・オッキーニを編集責任者に1940年末まで雑

誌の刊行を続ける。パピーニやソッフィチは，創刊時のストラパエーゼ（郷土派）的な路線を復活させたいとしたが，ルイジ・ファッラカーラは，ファシズム体制に迎合した『イル・フロンテスピツィオ』の最後の2年間は全く無駄な延命だった，と断じている[66]。

(3) 『イル・セルヴァッジョ』，『イル・バルジェッロ』

(a) 『イル・セルヴァッジョ』

ピエロ・ビゴンジャーリは，彼の青年時代に真摯な若者が熱読した雑誌として，『ソラリア』，『イル・フロンテスピツィオ』，『イル・セルヴァッジョ』の三つをあげているが[67]，『イル・セルヴァッジョ』はある意味で，『ソラリア』，『イル・フロンテスピツィオ』と並んで，両大戦間のフィレンツェ文化に第三の潮流が存在したことを示唆している。この雑誌は1924年7月，ファシストの地方ボスでぶどう酒業者のアンジョロ・ベンチーニによってシエナ近郊のコッレ・ヴァル・デルサで，4ページの週刊新聞として創刊された。創刊の目的は，同年6月のマッテオッティ事件によって生じたファシズム体制の危機に際し，ファシスト戦士の立場を擁護することにあった[68]。つまり，『イル・セルヴァッジョ』は地方のちっぽけな政治新聞として発足したのである。編集には同地出身の版画家ミーノ・マッカリが協力した。1926年3月にマッカリが編集長になると，編集部はフィレンツェに移り，発行も毎週から隔週になり，部数も増加，内容もこれまでの政治中心から文学・芸術中心へと変った。その後，1929年3月に編集部はシエナへ，1931年1月にはトリノ[69]，翌32年3月にはローマへ移り，刊行は不定期になったが，同地で1943年6月まで刊行を続けた[70]。

『イル・セルヴァッジョ』の名を有名にしたのは，いわゆるストラパエーゼ（郷土派）の雑誌として，マッシモ・ボンテンペッリが1926年に創刊したストラチッタ（都会派）の雑誌『ノヴェチント（'900)』との間に論争を戦わせたことである[71]。『イル・セルヴァッジョ』はイタリア固有の地方的，農村的伝統を擁護したが，雑誌の同人たちの中で伝統的要素を代表していたのは画家のアルデンゴ・ソッフィチである[72]。今世紀初頭のフィレンツェでパピーニらと『レオナルド』や『ラチェルバ』を刊行，前衛的な文化運動を指導したソッフィチも，この頃には保守的な立場に傾斜していた。だが，このグループ全員を頑迷な外国嫌いと考えてはならない。マリオ・ルーツィは，『イル・セルヴァッジョ』に代表されるストラパエーゼ（郷土派）の運動には，第一次大戦後のダンヌンツィオ亜流の連中のヨーロッパかぶれに対するアンチテーゼという側面があったことを指摘しているし[73]，ジュリアーノ・マナコルダは，マッカリがヨーロッパの主要な芸術傾向に通じていたことを説明している[74]。要するに，このグループが安易な外国崇拝には同調しなかった，ということであろう。マナコルダはまた，『イル・セルヴァッジョ』の創造面における最大の成果として，版画や素描，絵画をあげているが[75]，ここで紹介された芸術家にはマッカリ自身を初めとして，ソッフィチ，オットーネ・ロザイ，ジョルジョ・モランディ，フィリッポ・デ・ピシス，レナート・グットゥーゾ，マ

リオ・マファイらがいた。この顔触れを見ても，『イル・セルヴァッジョ』の性格がストラパエーゼ（郷土派）の呼称から連想されるような保守的，地方的，伝統的なものに偏っていたわけではないことがわかる。

政治的にはマッカリの周囲に，いわゆるファシズム左派に属する若者たちが集まっていた。それは，ファシズム体制の正常化とともに置き去りにされた，地方のファシスト青年たちである[76]。その一人であるロマーノ・ビレンキは，友人のエリオ・ヴィットリーニ同様，ファシズムは反ブルジョワ革命であり，新しい形の社会主義となりえる，と空しく期待していたことを回想している[77]。彼らは，ファシズム体制の指導者たちの日和見主義によって裏切られた革命を続行しようという絶望的な欲求に駆られていた。『イル・セルヴァッジョ』はこのような立場から1929年に政党に対する芸術の自律性を公然と擁護した。また，辛辣な風刺によって腐敗，堕落した政治や社会を笑いのめし，このためにしばしば当局の干渉を招き，雑誌は押収された。しかし，1930年代半ばになると，『イル・セルヴァッジョ』に参加した若者たちも長い苦難の道程を経て，ファシズムの本質に目覚め，反ファシズムの立場に向けて歩み出すことになる。この雑誌はこうした彼らの成長に糧を与えていた[79]。ビレンキの他に『イル・セルヴァッジョ』出身のこのような作家には，1931年にフィレンツェで雑誌『ルニヴェルサーレ』を創刊したベルト・リッチ，アッリーゴ・ベネデッティ，マリオ・トビーノ，ヴィタリアーノ・ブランカーティらがいた。『イル・セルヴァッジョ』自体もファシズムへの批判を強め，1930年代には軍国主義やナチズムの危険を訴え，人様差別の理論に反対している[80]。

(b) 『イル・バルジェッロ』

1929年のフィレンツェでは，カトリック系の雑誌『イル・フロンテスピツィオ』，ウーゴ・オイエッティによる『ペーガゾ』と並んで，『イル・バルジェッロ』が創刊された。この雑誌はフィレンツェのファシスト連盟機関紙として創刊された，きわめて政治色の強い週刊新聞で，ヴァッレッキ社から刊行された。しかし，その文化欄は充実しており，同時代のイタリア文化の中で異彩を放っていた。このようにこの種の雑誌としてはまことに稀有な現象が生じたのは，編集責任者で，フィレンツェのファシスト連盟の書記を務めるアレッサンドロ・パヴォリーニの個性によるところが大きい[81]。著名な言語学者を父に，作家で演出家のコッラードを兄に，1903年にフィレンツェの知識人の家庭に生まれた彼は，自分でも『ソラリア』に寄稿する第一級の知識人だった。彼にとってフィレンツェはイタリアの知性の都であり，こうした意識は当然『イル・バルジェッロ』の紙面にも反映された。パヴォリーニは1934年に編集を退き，ファシズム体制の指導者の道を歩み，1939年から43年まで人民文化相を務めている。

『イル・バルジェッロ』の文化欄の執筆者の中にはカルダレッリやソッフィチのような大家も含まれ，掲載される文章もきわめて多様で，そこに一貫した方針を認めるのは難しい[82]。『ソラリア』や『イル・フロンテスピツィオ』の場合と同じく，ここにもフィレンツェ的混淆がうかがわれる。しかし，この雑誌で特に注目を引くのは，エリオ・ヴィットリーニ，ロマー

ノ・ビレンキ，ヴァスコ・プラトリーニら，『イル・セルヴァッジョ』の項でも触れたファシズム左派の若者たちの存在である。ヴィットリーニは1931年に『イル・バルジェッロ』への寄稿を開始，書評欄を担当し，まず最初にマリオ・プラーツの『肉体と死と悪魔』を取り上げている。また，ムッソリーニの『アルナルドの生涯』を取り上げた際は，詩人としてのムッソリーニを絶賛している。プラトリーニも1934年，ムッソリーニのフィレンツェ訪問を扱った記事の中で国家の指導者に賛辞を寄せている。二人とも1935年に始まったイタリアのエチオピア侵略を支持しているが，胸中ではファシズム指導者の革命への裏切りや旧支配層との妥協に対する批判が徐々に熟していた。

彼らにとって，体制への懐疑は同時に自己批判であり，過去との決別を意味していた。そして，ここでも1936年に勃発したスペイン内戦が契機をなしていた(83)。ビレンキの回想によると，ヴィットリーニ，プラトリーニの二人はこのときスペインの共和派のために戦うため，イタリアを脱出することを真剣に考えていた(84)。しかし，すでに述べたように，ここに至る彼らの道のりは平坦ではなかった。ファシズムの興隆期に庶民の中で少年時代をすごした彼らは，ファシズムの革命性を信じ，そこに自らの希望を託す熱烈なファシストに成長していた。だが，彼らは少しずつファシズムの現実に幻滅することになる。それでも，容易にはそれを捨て去ることができず，それぞれ孤立した状態の中で長く苦しい試行錯誤の末，ファシズムを離脱，ついには本物の共産主義者となったのである(85)。この彼らの誤まりからの解放の過程を『イル・バルジェッロ』の紙面に認めることができる(86)。つまり，この雑誌は，1930年代に若者たちが重ねた一連の誤謬の跡をたどる上で無視できない資料を構成している(87)。

こうして，1935年から37年にかけて，『イル・バルジェッロ』の紙面ではヴィットリーニやプラトリーニ，ベルト・リッチやアルフォンソ・ガットらによる体制に批判的な論調が目立つようになる。しかし，当然のことながら，やがて彼らへの扉は閉ざされ，プラトリーニやガットは，1938年に創刊された『カンポ・ディ・マルテ』で彼らの主張をより先鋭に展開することになる。

(4) 『ラ・リフォルマ・レッテラーリア』，『レッテラトゥーラ』，『カンポ・ディ・マルテ』

(a) 『ラ・リフォルマ・レッテラーリア』

先に『ソラリア』廃刊の経緯に触れた際，この雑誌の末期に思想を重視するアルベルト・カロッチらの立場と，文学の純粋性を絶対視するアレッサンドロ・ボンサンティらの立場との間に対立が生じていたことを指摘したが，この分岐の一方の産物として，『ソラリア』廃刊から数か月が経過した1936年11月，カロッチやジャコモ・ノヴェンタによって『ラ・リフォルマ・レッテラーリア』が創刊された。しかしながら，カロッチはこの雑誌の運営にほとんど参加せず，その意味でこれは実質的にノヴェンタの雑誌であった(88)。1898年に北イタリア，ヴェネト地方に生まれた彼はトリノ大学に学び，ピエーロ・ゴベッティらを知った。ノヴェンタは，

知識人の取るべき態度として，自らを汚すことを恐れることなく現実に立ち向かうことを主張したが，ゴベッティがはっきりと反ファシズムの立場を取ったのに対し，ファシズムを支持し，偉大なイタリアという幻想に酔い癖れつつエチオピア併合を賛美した。しかし，彼の混沌とした思想はファシズムの正統な教義と相容れるものでもなかった。

タイトルが示すように，この雑誌の目的は沈滞した文学および文学者を変革することにあった。だが，実際には思想や哲学の問題に忙殺され，文学には二義的な地位しか与えられなかった。そんなわけで，『ソラリア』から分岐したにもかかわらず，その同人のほとんどは，ノヴェンタの奇矯な言説に辟易したこともあって，もう一方の『レッテラトゥーラ』に移り，『ラ・リフォルマ・レッテラーリア』には寄稿しなかった。その文学上の役割としては，マリオ・ラ・カーヴァ，アントニオ・デルフィーニ，ジェーノ・パンパローニ，フランコ・フォルティーニらの若い才能を発掘したこと，当時フィレンツェで有力だったエルメティズモの傾向を批判したことなどがわずかに指摘できる。この雑誌の寄稿者としてはラッファエッロ・ラマ，マリオ・ソルダーティ，ジュゼッペ・ボッタイなどの名前が目に付く。『ラ・リフォルマ・レッテラーリア』は創刊3年後の1939年末，7-10月付の第31-33合併号を出して，ファシズム当局の検閲により廃刊に追い込まれた。

(b) 『レッテラトゥーラ』

先に見たように，アレッサンドロ・ボンサンティは1930年から33年までアルベルト・カロッチとともに『ソラリア』の編集にあたった経験を持っていたが，思想派のカロッチと文学派のボンサンティの対立が『ソラリア』の廃刊とその分岐を促したわけである。『レッテラトゥーラ』は『ラ・リフォルマ・レッテラーリア』にやや遅れて，1937年1月，ボンサンティを編集長に創刊され，パレンティ社から刊行された。戦争の影響で休刊する1943年まで発行を続け，戦後46年に再刊され，結局1968年まで続いたが，ここでは43年までを問題にしたい。

ジョルジョ・ルーティは，この雑誌の性格について，現代社会の公的な問題には関与することなく，その代り国際的視野に立って文学上の諸問題についての論議にじっくり取り組む姿勢を示した，と説明している[89]。カルロ・ボーもその功績として，外国文学との接触を保つ必要性の主張をあげている[90]。この意味で『レッテラトゥーラ』は『ソラリア』の立場を継承していたわけであるが，ボンサンティ自身もエチオピア併合とスペイン市民戦争に関連して指摘しているように，二つの雑誌が置かれていた政治状況は大きく変化していた[91]。1934年のトリノにおける反ファシズム知識人の逮捕や37年の人民文化省の創設を見ても，知識人の置かれた状況が一段と厳しいものになっていたことがうかがえる。ジュリアーノ・マナコルダが指摘しているように，『レッテラトゥーラ』の姿勢は，知識人が象牙の塔の中に孤立するのを最早容認せず，彼らを体制内に取り込もうとするファシズム当局に対する一つの抵抗であった[92]。

次にこの雑誌の具体的な内容について簡単に見ることにしよう[93]。1937年の創刊から43年

の休刊まで毎年4回，合計25号を刊行しているが（ただし，1942年は3号，1943年は2号のみ），別に1939年にダンヌンツィオに関する臨時特集号を出している。他にも現代ドイツ文学，現代スペイン文学，現代音楽に関する臨時特集号が企画されていたが，実現には至らなかった。各号とも160から180ページ程度で，内容はほぼ同じように分類できる。まず全体の半分以上が，毎回10篇以上の評論と創作にあてられていた。長いものは何度かにわたって連載されたが，20世紀イタリア文学の重要な成果に数えられる，ヴィットリーニの『シチリアでの会話』とガッダの『悲しみの認識』を連載したことは，『レッテラトゥーラ』の功績を考える上で逸するわけにゆかない[94]。また，かなりの紙数が翻訳にあてられているが，翻訳された作品はゲーテなどの古典から，英米仏独西露の現代作家のものまできわめて多岐にわたっている。

次に毎回異なる筆者による連載の試みとして，今世紀のイタリア文学を回顧した『《ラ・ヴォーチェ》から《ラ・ロンダ》まで』，それに『外国文学研究』のページが続いている。それから，2，3ページずつの短い書評が毎回10篇ほど収められ，最後に音楽，美術，映画のうち通常二つ，場合によっては一つについて，5ページほどの報告が雑誌を締めくくっている。また，毎回ジョルジョ・モランディやジャコモ・マンズー，マリノ・マリーニらの芸術家たちによる図版が雑誌を飾っている。印刷と出版の専門家エンリコ・ヴァッレッキは，印刷の面から見てもよくできた雑誌である，と『レッテラトゥーラ』を評している[95]。このことは，この雑誌の美に対する厳格な姿勢をよく表している。

このような多彩な内容からもわかるように，きわめて広範な顔触れがこの雑誌に寄稿していた。その中で中核をしていたのは，ヴィットリーニを初めとする『ソラリア』の流れを汲む人びとや，カルロ・ボーに代表される，1938年に『イル・フロンテスピツィオ』を離脱したエルメティズモのグループなどであるが，300名を超える執筆者はさまざまな世代，さまざまな傾向に属していた。このような『レッテラウゥーラ』の多様性は，後にヴュシュー文庫の館長を務めることになるボンサンティの個性の反映であるとともに，『ラ・ヴォーチェ』から『ソラリア』や『イル・フロンテスピツィオ』へ受け継がれた，フィレンツェ的混淆という伝統の実践でもあった。

(c) 『カンポ・ディ・マルテ』

カルロ・ボーを先頭とするエルメティズモのグループは，『イル・フロンテスピツィオ』からの離脱に先立ち，自分たちの雑誌を創刊する計画を，フィレンツェの出版業者ヴァッレッキに持ちかけていた。ところが，ヴァッレッキのほうはあまりこの企画に気乗りがしなかった。『カンポ・ディ・マルテ』の最も年少の執筆者であったルッジェーロ・ヤコッビはこの事情を，前年創刊された『レッテラトゥーラ』の二番煎じになる恐れがあったため，と説明している[96]。そこでヴァッレッキは，小さな読書新聞を取りあえずヴァッレッキ社の会報という形で発足させることに決め，これをアルフォンソ・ガットとヴァスコ・プラトリーニの二人に任せることにした。こうして，『カンポ・ディ・マルテ』の1938年8月1日付の創刊号は，エン

リコ・ヴァッレッキを発行人に，ガットとプラトリーニの編集によって刊行された。サブタイトルに文学および芸術活動についての隔週刊行誌とあるように，刊行は一週おきで，各号は4ページからなり，判は日本の普通の新聞を一回り小さくした程度の大きさだった。

しかしながら，ガットとプラトリーニにはこの新聞をヴァッレッキの方針に沿って編集する気は毛頭なく，活発で挑戦的な紙面が作られた。ファシズム当局の圧力によって中断を余儀なくさせられながらも1年間存続し，何度か合併号を出したために名目で22号，実質で17号を刊行することができたのは，老練なヴァッレッキの庇護によるものであった。ジュリアーノ・マナコルダはこの雑誌について，プラトリーニとガットが『カンポ・ディ・マルテ』を，イタリアの知識人の，特にエルメティズモのグループの，当時における最も活発で興味深い出会いの場に変えた，と説明している(97)。執筆者の中心はカルロ・ボーやピエーロ・ビゴンジャーリ，レオーネ・トラベルソ，アレッサンドロ・パッロンキ，マリオ・ルーツィ，オレステ・マクリーらエルメティズモのグループに属する人びとだったが，ジャンシーロ・フェッラータやエリオ・ヴィットリーニのような『ソラリア』の流れを汲む人びとや，エウジェニオ・モンターレやカミッロ・ズバルバロのようなベテランも執筆していた。つまり，『カンポ・ディ・マルテ』はある意味で，フィレンツェのカフェ，ジュッベ・ロッセに集う仲間たちの雑誌である，と言える。パッロンキはこの雑誌のことを，我々若者の雑誌という感じがした，と回想するとともに，『ソラリア』，『イル・フロンテスピツィオ』，『レッテラトゥーラ』の中間点を示しながら，そのいずれともかなり異なっていた，とその特異な性格を説明している(98)。

雑誌の性格を理解する上で，編集を担当したガットとプラトリーニについて少し触れておくことが必要となろう。1909年生まれのガットと13年生まれのプラトリーニはともに，革命としてのファシズムという幻想を信ずる立場から思想的出発を遂げ，『イル・バルジェッロ』への寄稿という体験を共有していたが，ガットは1936年に反ファシズムのかどで逮捕され，プラトリーニもヴィットリーニに兄事する形で思想的転向をなし遂げ，すでに述べたように，スペイン内戦に際しては彼とともに反フランコの義勇軍に参加することを考えるまでになっていた。『カンポ・ディ・マルテ』に認められる，文学と社会との関係，文学者の社会参加，民衆と文化，といった視点は二人の意識を反映している。彼らの挑発的，戦闘的姿勢はあらゆる傾向の人びとを敵にしたが，ファシズムの圧倒的優勢という絶望的状況の中で自由の最後の砦として，来たるべき自由な未来への窓として，文学を擁護しようという気持ちは(99)，この雑誌の執筆者全員に共通していた。

『カンポ・ディ・マルテ』が当局の干渉を招く直接のきっかけは，1938年11月1日付の第7号で展開された外国文化の積極的な紹介にあった。この号はオレステ・マクリーのアンドレ・ルソーに対する書評，ジュリア・ヴェロネージのドガとヴァレリイについての論考，ルイジ・ベルティによるアメリカのシンボリスト，リチャード・ハヴィーについての評論，外国の建築を扱ったアンナ・マリア・マッツケッリの評論などを含み，実に紙面の半分以上が外国文化に関する記事で埋められていた。こうした傾向は他の号にも等しく認められる。また，4ペー

ジという紙数にもかかわらず，創作にも紙面がさかれ，モンターレは詩集『機会』に納められる一篇を提供，ヴィットリーニも『エリカとその兄弟』の一節を掲載している。『カンポ・ディ・マルテ』は，ナチス・ドイツのポーランド侵略によって第二次大戦の火ぶたが切られる直前に1年間の活動の幕を閉じたが，その燦然たる輝きはまさに大戦を目前にしたフィレンツェ文化の最後の栄光を象徴している，と言える。

（本稿は，1991年10月12日に早稲田大学で行われたイタリア言語・文化研究会における発表をもとに書き起こしたものである。）

（本学専任講師＝イタリア語担当）

注

(1) アルベルト・モラヴィア／アラン・エルカン　大久保昭男訳『モラヴィア自伝』（河出書房新社，1992年），99頁。Alberto Moravia／Alain Elkan, *Vita di Moravia,* (Paris, 1991).

(2) 『ソラリア』の年度別の刊行とそれぞれのページ数については，下記の書物に掲げられたグラフを参照。Pier Paolo Carnalori, 《*Solaria*》*(1926-1934)* Indice ragionato, (Firenze, 1989), pp. 47-56. ここには他に，編者による雑誌の概括，各号の目次と主要記事の簡単な内容紹介，執筆者別の記事のタイトルとそれが掲載された雑誌のナンバー，図版については芸術家別の作品のタイトルとそれが掲載された雑誌のナンバーのリストを納めている。また，図版についてはほぼ半数の作品を実際に収録している。

(3) Vittoria Corti, *Il mondo di Solaria,* (Salerno, 1990), p. 41.

(4) Giuliano Manacorda, *Momenti della letteratura italiana degli anni trenta,* (Foggia, 1981), p.8.

(5) Manlio Cancogni-Giuliano Manacarda, *Libro e moschetto Dialogo sulla cultura italiana durante il fascismo,* (Torino, 1979), p. 144.

(6) Giuliano Manacorda, *Momenti… op. cit.,* p. 6. また，ファシズムの文化政策については，ファシズム研究会編『イタリア・ファシズム，戦士の革命・生産者の国家』（太陽出版，1985年）〝第8章　ファシズムの文化政策〟297-328頁。

(7) Giorgio Luti, *La letteratura nel ventennio fascista,* (Firenze, 1973), p. 77. 本書は，*Cronache letterarie tra le due guerre : 1920-1940,* (Bari, 1966)の改訂版。

(8) 雑誌『ラ・ヴォーチェ』については，拙稿「雑誌《ラ・ヴォーチェ》の軌跡（1908-1913）」（『社会科学討究』第97号，1988年3月）371-402頁を参照。

(9) Alberto Folin (a cura di), *Solaria-Lettratura-Campo di Marte,* (Treviso, 1973), pp. 2-3.

(10) Vittoria Corti, *Il mondo… op. cit.,* p. 37.

(11) *Ibid.,* p. 44

(12) *Ibid.,* p. 39.

(13) Manlio Cancogni-Giuliano Manacarda, *Libro… op. cit.,* pp. 151-152.

(14) Giorgio Luti, *La letteratura… op. cit.,* p. 77.

(15) Alberto Folin (a cura di), *Solaria… op. cit.,* p. 4.

(16) Renato Bertacchini, *Le riviste del novecento,* (Firenze, 1981), p. 180. Elio Vittorini, *Diario in pubblico,* (Milano, 1957), pp. 173-74. からの引用。

(17) Alberto Folin (a cura di), *Solaria… op. cit.,* p. 5. Elio Vittorini, "Scarico di coscienza," in 《*Fiera letteraria*》 *il 13 ottobre,* (1929) からの引用。

(18) 米川良夫他『イタリア文学史』（東京大学出版会，1985年），296頁。

(19) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 139.
(20) Alberto Folin (a cura di), *Solaria*… *op. cit.*, p. 5.
(21) Vittoria Corti, *Il mondo*… *op. cit.*, pp. 42-43.
(22) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.*, pp. 42-43.
(23) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 123.
(24) *Ibid.*, p. 81.
(25) *Ibid.*, p. 87.
(26) Pier Paolo Carnalori, 《*Solaria*》… *op. cit.*, p. 20.
(27) Manlio Cancogni-Giuliano Manacorda, *Libro*… *op. cit.*, p. 150.
(28) Vittoria Corti, *Il mondo*… *op. cit.*, p. 43.
(29) *Giorgio Luti, La letteratura*… *op. cit.*, p. 97.
(30) *Ibid.*, p. 115.
(31) Vittoria Corti, *Il mondo*… *op. cit.*, p. 47.
(32) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.*, pp. 68-69.
(33) *Ibid.*, pp. 121-124.
(34) Renato Bertacchini, *Le riviste*… *op. cit.*, p. 181.
(35) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 176.
(36) Luigi Fallacara (a cura di), *Il Frontespizio* 1929/1938, (San Giovanni Valdarno-Roma, 1961) の巻末に『イル・フロンテスピツィオ』の著者別の執筆目録があり，これにより 1929 年の 8 月号以降，毎月刊行されていたことがわかる。カルロ・ベトッキは，1929 年は 5 月に 1 号出ただけで，雑誌としての発足は 1930 年 1 月から，としているが，これは彼の記憶違いと思われる。Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo Il tempo dell'ermetismo,* (Milano, 1986), p. 54.
(37) Piero Bargellini, *Pagine di una vita,* (Firenze, 1981), p. 45.
(38) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 176. Renato Bertacchini, *Le riviste*… *op. cit.*, p. 165.オレステ・マクリーは，1933 年頃までフィオレンティーナ書店の刊行としている。初め印刷だけがヴァッレッキ社に移ったということか。この点については未詳。Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 71.
(39) *Ibid.*, p. 52.
(40) *Ibid.*, pp. 28-29.
(41) Anna Panicali, *Le riviste del periodo fascista,* (Messina-Firenze, 1978), p. 56.
(42) *Ibid.*, p. 56.
(43) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 16.
(44) *Ibid.*, p. 28.
(45) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 178.
(46) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 28.
(47) *Ibid.*, p. 139.
(48) Piero Bargellini, *Pagine*… *op. cit.*, p. 60.
(49) *Anna Panicali, Le riviste*… *op. cit.*, p. 60.
(50) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 55.
(51) *Ibid.*, p. 21.
(52) Luigi Fallacara (a cura di), *Il Frontespizio*… *op. cit.*, p. 14.

(53) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 80.
(54) *Ibid.*, p. 97.
(55) Renato Bertacchini, *Le riviste*… *op. cit.*, p. 168.
(56) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 183.
(57) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 92.
(58) *Ibid.*, p. 94.
(59) *Ibid.*, p. 17.
(60) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.*, p. 127.
(61) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 18.
(62) *Ibid.*, p. 19.
(63) Romano Bilenchi, *Amici*, (Milano, 1988), p. 79.
(64) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 96.
(65) *Ibid.*, p. 55.
(66) Luigi Fallacara (a cura di), *Il Frontespizio*… *op. cit.*, p. 18.
(67) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 100.
(68) Renato Bertacchini, *Le riviste*… *op. cit.*, p. 170.
(69) トリノ時代のマッカリと『イル・セルヴァッジョ』については，Romano Bilenchi, *Amici*… *op. cit.*, pp. 3-14.
(70) この雑誌の変遷については，Giuliano Manacorda, *Storia della letteratura italiana tra le due guerre, 1919-1943*, (Roma, 1980), p. 116.
(71) この論争については，米川良夫他『イタリア文学史』（前掲書）308-309頁。
(72) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 162.
(73) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 30.
(74) Giuliano Manacorda, *Storia*… *op. cit.*, p. 119.
(75) *Ibid.*, p. 119.
(76) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 159.
(77) Romano Bilenchi, *Amici*… *op. cit.*, p. 114.
(78) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, pp. 167-168.
(79) Giuliano Manacorda, *Storia*… *op. cit.*, p. 120.
(80) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, pp. 169-170.
(81) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.*, pp. 89-90.
(82) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, pp. 206.
(83) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.*, pp. 105.
(84) Romano Bilenchi, *Amici*… *op. cit.*, p. 122.
(85) *Ibid.*, p. 240.
(86) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.*, p. 96.
(87) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, p. 214.
(88) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.*, p. 127.
(89) Giorgio Luti, *La letteratura*… *op. cit.*, pp. 188-189.
(90) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.*, p. 38.
(91) Manlio Cancogni-Giuliano Manacorda, *Libro*… *op. cit.*, p. 150.

(92) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.,* p. 145.

(93) Gioia Sebastiani, *Letteratura 1937-1947 Indici,* (Milano, 1991) を参照。ここには各号の目次，著者別の記事のタイトルとそれが掲載された雑誌のナンバー，図版のリスト，翻訳者別の原著者のリスト，および『レッテラトゥーラ』の叢書として出版された50冊を超える書物のリストが納められている。

(94) Giuliano Manacorda, *Momenti*… *op. cit.,* p. 148.

(95) Manlio Cancogni-Giuliano Manacorda, *Libro*… *op. cit.,* p. 153.

(96) Ruggero Jacobbi, "*Campo di Marte" Trent'anni dopo 1938/1968,* (Firenze, 1969), p. 12.本書には，この雑誌の展開についての説明，雑誌のアンソロジー，各号の目次が納められている。

(97) Giuliano Manacorda, *Momenti*…*op. cit.,* pp. 160-161.

(98) Giorgio Tabanelli, *Carlo Bo*… *op. cit.,* p. 128.

(99) Ruggero Jacobbi, "*Campo di Marte"*… *op. cit.,* pp. 15-16.